

ザメンホフとシオニズム

長 沼 宗 昭

はじめに

ワルシャワのユダヤ人墓地の一画、入口からもそれほど離れていないあたりに、計画言語エスペラントの創案者L・L・ザメンホフの墓がある。きわめて特異な形状をなしている。周囲に立ち並ぶ、厚みのある板を直立させたような形であったり、角柱のような形の、多くの墓とは異なつて、ひととき異彩を放っている。手前の斜面には、青緑色の五芒星をかたどり、その中央部にエスペラントを象徴するEの文字を記したモザイク画がはめ込まれている。その脇の六段ほどの階段を上がつた所に、四角錐の天地を逆にして地面に埋め込み、その石塊の上に地球を表しているのであるうか、球体を載せたデザインの墓石がある。そして、斜面部と墓石の基壇の全体を低い鉄の柵が囲んでいる。この、まず類例のない墓を筆者が訪れたのは二〇一四年八月三〇日のことであつた。墓地内には、トレブリンカ強

制収容所で殺害されたヤヌーシュ・コルチャック医師の記念碑があり、また他にも調べたい墓があったので、結局、少なくとも二、三時間はそこに滞在していたことになる。この間、墓地内には数組の、恐らくユダヤ系の訪問者が訪ねてきており、ヘブライ語やアメリカ英語の静かな会話が流れていた。しかし、筆者以外に、ザメンホフの墓を訪れた者がいた様子はなかった。墓石の前の狭い植込みには、小さな赤い花が咲きこぼれていたが、手向けたような花束などは見当たらない。だが、さらに子細に眺めてみると、墓石の上にわずかに小石が一かけら載せられていたのである。

この光景は何を物語っているであろうか。一般にユダヤ人のあいだには、墓を訪れた者は小石を供えるという、今に続く伝統的な慣習がある。また、近年ではだいぶ変わってきたが、花を供える慣習は元来はなかった。したがって、短時間の観測での断定は早計に過ぎるが、ユダヤ人がザメンホフの墓を訪れることも、非ユダヤ人エスぺランテイストが「大先生」⁽²⁾の墓を詣でることも少なくなっているのではないかと推測できるのである。では今日、多くのユダヤ人にとって、さらには非ユダヤ人である我々にとって、ザメンホフはいかなる存在なのであるか。この問題を考える上での重要な鍵は、ザメンホフとシオニズムとの関係であり、またザメンホフの「ユダヤ人性」はどのようなものであったのか、ということであると思われる。そこで小稿では、主に、ザメンホフとシオニズムの関係について検討してみたい。

シオニストとしてのザメンホフ

ルドヴィーコ・ラザーロ・ザメンホフ Ludoviko Lazaro Zamenhof（エスぺラント表記）は、一八五九年十二月一五

日（ロシア暦十二月三日、ユダヤ教暦五六二〇年キスレフ月一九日）、現在のポーランド北東部ビャウイストク Białystok に生まれた。

一七世紀後半にブラニツキー伯領となったビャウイストクでは、同伯の庇護のもとにユダヤ人コミュニティが形成され、一八世紀半ばには自治権さえ与えられていた。さらに、西欧などとは異なつて、ユダヤ人が市の行政や手工業ギルドに参加することが公的に認められていたのである。ところが一八世紀末のポーランド分割によつて、まずは一七九五年にプロイセン領になり、さらに一八〇七年のティルジット条約でロシア領となつて、この地域のユダヤ人の境遇は悪化していった。ただし、同市のユダヤ人人口そのものは、むしろ一九世紀初めにかけて急増していく。それは、帝政ロシアが、新たに獲得した旧ポーランド地域にユダヤ人強制居住地域を設定して、そこにユダヤ人を追い込み、さらに強制居住地域内の農村部からも追い立てる政策をとつた結果であつた。しかも、同市がロシアと中・西欧を結ぶ交易上の重要な拠点の一つであつたことも、ユダヤ人の流入を促すことにつながつた。

ともあれ、ザメンホフが生まれた頃のビャウイストクは公的にはロシア語でビェラストーク Biełostok と呼ばれ、人口の圧倒的多数をユダヤ人が占めるという町だったのである。ちなみに、一八五六年のユダヤ人人口は九、五四七人で同市総人口中の六九・〇％を占めており、同様に一八六一年では一一、八七二人（六九・八％）であつた。さらに、一九世紀末の工業化進行期に繊維産業が発展していくなかでユダヤ人人口も急増しており、一八九五年では四七、七八三人（七六・〇％）を数えるにいたつた。こうした状況は第一次大戦まではあまり変わらず、ユダヤ人は市人口のほぼ七〇％前後を占めていた。しかし、ユダヤ人の大半は貧しい行商人や失業者、ホームレスであつたといふ^③。ユダヤ人以外では、ポーランド人、ロシア人、ドイツ人、さらにベラルーシ人などが住んでいたが、もちろん圧

倒的な権力を握っていたのはロシア人であり、ドイツ人もとくに経済的な面で重要な地歩を占めていた。したがってザメンホフも、公式には、父称をミドルネームに置き、ロシア語でラーザリ・マルコヴィッチ・ザミエンゴフ Лазарь Маркович Заменгоф と表記された。

ザメンホフの伝記類⁽⁴⁾は、一樣に、語学教師であつた父マルクス(伝統的なユダヤ人名としてはモルデカイ)が家庭内の使用言語をロシア語とする融和的な同化主義者であつたことを指摘しており、この事実から、マルクスがマスキリーム(ハスカラー運動信奉者)であつたことがうかがえる。一八世紀ベルリンでのモーゼス・メンデルスゾーン Moses Mendelssohn の活動に始まるハスカラー運動(ユダヤ人社会内の啓蒙運動)は、まずはドイツ語圏に広まり、さらにプロイセンやオーストリアがポーランドを分割統治していくなかで、一八世紀末から一九世紀初頭にかけて旧ポーランド中央部にも浸透していった⁽⁶⁾。ビヤウストクの場合も、一時的であれプロイセン支配下に組み込まれ、ドイツ・ユダヤ人社会との接触によって、この波に洗われていた。そしてハスカラー運動は、世俗的な教育を重視し、キリスト教ヨーロッパ世界の文化を受容することを主張していたのである。

ところが、ビヤウストクのなかでもハスカラー運動の信奉者は、概して一部の、そしてユダヤ人社会内部では相対的に裕福なグループに属していたし、そもそもユダヤ人自体が一樣ではなかった。強制居住地域内のユダヤ人には、カフカス系や、ブハラ系、クリミア系もいたし、ザメンホフ家の場合は、今日のリトアニアよりもはるかに広大な歴史のリトアニアを出身と考える、リトアニア系ユダヤ人(リトヴァク)に属していたのである。このリトアニア系は、ユダヤ人全体のなかでも独自の位置を占めており、たとえば一八世紀半ば以降、ポーランド南部からウクライナにかけて席卷していったユダヤ教神秘主義運動(ハシディズム)と対立する傾向が強かった。ビヤウストクは、ミトナ

グデイムと呼ばれたハシディズム反対派の拠点の一つでもあった⁽⁷⁾。また、アシュケナジムと呼ばれる中・東欧のユダヤ人は生活言語としてイディッシュ語を用いたと一般に説明されるが、そのイディッシュ語にも方言があり、地方ごとの隔たりは決して小さくはなかった⁽⁸⁾。こうしたユダヤ人社会内にある、さまざまなレヴェルでの複雑な差異をともなった多様性は、我々にとっては非常に分かりにくい問題ではあるが、決して見過ごしてはならない問題である。このユダヤ人の多様性をも前提にして、諸民族間の対立と差別を克服したいとするザメンホフの願望が、エスペラントを創案し、後述のホマニスモを構想させたことは間違いない。

ザメンホフは、一八七九年の秋からモスクワ大学で医学を学び始め、その後、家庭の経済的事情もあつてワルシャワ大学に転学して研鑽を積んでいた。すでに七三年暮れに、父マルクスがワルシャワでの教職を得、一家がワルシャワに引越していたので、ザメンホフも自宅から通学することができたからである。この学生時代に、ザメンホフは急速に「シオニズム」に接近していく。後の一九〇七年、第三回エスペラント世界大会がイギリスのケンブリッジで開かれた折に、ロンドンの『ジューイッシュ・クロニクル』紙のインタビューに際して、次のように回想している。「私は、常に同胞の社会的生活に強い関心を抱いておりましたし、若い頃は、熱心な政治的シオニストでした。それは、ヘルツルがこの分野に登場し、ユダヤ人国家という思想がユダヤ人の間で評判になるよりも大分以前のことでした。早くも一八八一年には、その頃はモスクワ大学の学生だったのですが、一五人の仲間の学生と会合を開き、私が考えてきた計画を提案しました。その計画では、世界のどこか人の住んでいない地域にユダヤ人のコロニーを建設することになっていました。このコロニーは、独立したユダヤ人国家の始まりを象徴するものであり、その中心になっていくものでした。仲間の学生たちを説得して、我々は、ロシアで最初の、ユダヤ人による何らかの政治組織を結成

しましたし、私自身はそうに思っています。^⑨」

ただし、ザメンホフたちが一八八〇年代の初めに、実際にシオニストという用語を用いていたとは考えにくい。一九世紀末以前から、パレスチナを「エレッツ・イスラエル（イスラエルの地）」としてそこに「帰還」する考え方は、思想以前の空想的なものから象徴的なものまで含めて、少なからず存在した。しかしシオニズムやシオニストということばは、ビルンバウム Nathan Birnbaum の造語であって、その初出も一八八五年を遡ることはないと考えられている。そして何よりも重要なことは、ビルンバウムが、ユダヤ人とは民族であるという見解を明確に保持した上でシオニズム概念を規定したことであり、その強い影響下に、ヘルツル Theodor Herzl が『ユダヤ人国家』（一八九六年）を著して政治的シオニズムの歴史が始まったことである。

もともと、ザメンホフの学生時代が政治的シオニズムをまさに孵化させる時期であったことは間違いない。ロシア皇帝アレクサンドル二世が一八八一年三月に暗殺されると、それを契機に、出稼ぎ農民や労働者がユダヤ人住民に対して集団的略奪・暴行・虐殺、すなわちポグロムを行い、キエフを中心に約一か月間続いたのである。その後も、翌年にかけてウクライナからロシア南部で頻発した。このポグロムに衝撃を受けた一人にオデッサ在住の医師ピンスケル Leon Pinsker がいた。彼は、ロシア最初のユダヤ人向け週刊紙『ラースヴェト（黎明）』創刊メンバーの一人、かつ定期的寄稿者であり、ハスカラー運動の共鳴者でもあったから、当初はロシア社会へのユダヤ人の同化を推進しようとしていたのである。また彼は、オデッサ大学に入学した最初のユダヤ人学生であり、その後の文筆活動などを通じて、ユダヤ人社会内では知名度の高い人物であった。そのようなピンスケルが、一八八二年一月、従来の立場を改め、反ユダヤ主義の心理的・社会的原因について分析した上で、ユダヤ人のナショナル・センターの樹立とそこへの

移住を訴える著作をドイツ語で発表した。匿名ではあったが、『自力解放 Autoemanzipation』をうたい、ロシアのユダヤ人が西欧の同胞に対して警告を発する、というスタイルをとっていた。⁽¹⁰⁾この書名を受け継ぎ、意味合いはほとんど変わらないが、より主体的に関わっていくニュアンスをにじませた誌名を採用して、ビルンバウムが一八八五年にドイツ語誌『自力解放 Selbstemanzipation』を創刊し、そこでシオニズムということばも用いられたのである。

ザメンホフはいえ、彼は一八八二年の一月から二月にかけて、「我々は最終的にはいかなる行動をとるべきか？」という長文の論文を『ラースヴェト』紙に分載しているが、そこではガムゼフォン Gamsefont というペンネームを使っていた。これは、ザメンホフのロシア語綴りの順番を並べ替えたアナグラムである。そして彼は、ポーランド、ウクライナ、さらにルーマニアで生じたポグロムに対してユダヤ人がなすべき回答は原則的には国外への移住である、だがいずこへ行くべきかと問い、主にアメリカ案とパレスチナ案について検討していく。当初アメリカ案を支持していたザメンホフも、次第にパレスチナ案に傾斜していくのだが、やがて運動そのものからも離れていく。⁽¹¹⁾

ザメンホフの孫であるザレスキ Zaleski ザメンホフは、祖父ルドヴィコがたどった思考上の変化を次のように巧みに要約している。「パレスチナは、世界各地に散らばっているすべてのユダヤ人を受け入れるには、あまりに領土が小さく、彼らの生計を維持させるには、不毛の地のように彼には見えませんでした。一部のユダヤ人だけが中東地域に移住すると、現在の地に留まっている人は、これまで以上に迫害を受け、おまえたちも、おまえらのパレスチナに行ってしまう」という声をいつも聞かなくてはならなくなる、とルドヴィコは考えたのです。当時イスラム教国だったトルコの地に、ユダヤ人国家を創るという考えは非現実的だと考えました。また、キリスト教徒にとっても神聖な土地をユダヤ人が占拠することを、強力なキリスト教国家が許さないだろうと思っていました。それに加え、ユダヤ人国家の

住民が、いつまでも先住民の憎しみをかうことを恐れたのです。パレスチナのユダヤ人は、火山の上にたえまなくいるようなものだ^⑫というわけです。彼の心配は、その後の歴史を見れば、すべてが誤っていたとは言えません^⑬。

さらにザメンホフは、次節で言及するヒレリスモ（ヒレル主義）についての文書を一九〇一年に作成するが、そのなかで「ユダヤ人問題の原因はユダヤ教にこそある」と再三強調し、最終的には、「ユダヤ人問題とユダヤ人の追放を解決するためには、ユダヤ教の改革という方法しかありえない」、とまで主張した^⑭。こうした発言は当時の多くのユダヤ人にとっては理解不能なものであり、日常的な医師としての活動はともかく、思想的な面ではユダヤ人社会から疎遠になっていかざるを得なかったのである。ザメンホフは晩年、普遍的、博愛主義的色彩を強く帯びた、一種の宗教思想にまで到達するが、その側面を最もよく受け継いだのが次女のリディア（第三子、一九〇四—四二）で、彼女は後に、イスラームから派生したが、より寛容で普遍宗教の様相を呈しているバハイー教に入信する。しかし彼女も、ザメンホフの子孫たちの多くがたどったようにホロコーストの犠牲者となって、トレブリンカ強制収容所で殺害された^⑮。

ホマラニスモ

エスペラントは一八八七年、つまりザメンホフが二七歳の時に公表されたといわれている。しかし彼自身は、生まれ育った環境のなかから、民族や人種間の対立・紛争を解決するための手段としての世界共通語という構想を、一〇代の半ばから素朴な形で温めだしていた。そして、すでに一八歳にして、「世界語 Lingve Universal」を考案していた。さらにその延長上に、エスペラント博士著『国際語——序言並びに全教程 ロシア人用』と表紙に記された、わ

ずか四二ページの記念碑的パンフレットが刊行されたのである。つまりザメンホフにあつては、純粹にことばへの関心からエスペラントを創案したのではなく、いかに素朴なものであつたにせよ、国際平和に寄与しようという理想がまず根底にあり、そのための手段として、異なる言語・文化を有する諸民族がたがいに対等な立場で意思疎通できる共通言語を着想したのである。

エスペラント運動自体は、紆余曲折を経て次第に広がりを見せ、一九〇〇年頃にはその中心がフランスに移つていった。ついに一九〇五年には、フランスのブローニュ・シュル・メール *Boulogne-sur-mer* で第一回世界エスペラント大会が開かれるにいたつた。その一方で、一八九四年にドレフュス事件が勃発し、フランスの国論を二分する状況が続いていたこともあつて、¹⁵ ザメンホフがユダヤ人であることがエスペラントの普及にとって不利に作用すると危惧し、その事実を曖昧にしたり、隠そうとする傾向すら生じていた。そうした状況に対して、ザメンホフは一種の世界宗教ともいふべき構想を練り上げ、第一回大会で発表しようとしたのである。しかし周囲のエスペランティストたちは、時期尚早であるとして、やがてヒレリスモ（ヒレル主義）と呼ばれることになるこのアイディアの発表を押しとどめてしまった。ヒレルとは、前一世紀末に実在したユダヤ教聖職者で、「周知の伝説によると、タルムードの賢者のなかでも最も偉大なヒレルは、「ひとにされたくないことを隣人に対してしてはならない」という規則がトーラーのすべてであり、残りはその注釈にすぎない、と宣言している」¹⁶、とユダヤ教の伝統のなかで理解されてきた人物であつた。つまり、ザメンホフ周辺のエスペランティストたちのある部分は、エスペラントの発展を願う一方で、反ユダヤ主義が根強く存在する現実が障害となることを恐れ、極力、エスペラントからユダヤ人やユダヤ教のイメージを払拭させようと画策したのであつた。そこでザメンホフ自身は、そうした動きにも一部配慮しつつ、内容はほと

んど変えることなく名称をヒレリスモからホマラニスモに変えていく。人類主義と一般に訳されているホマラニスモという用語を用いることで、より普遍化を図ったのである。¹⁷

ヒレリスモやホマラニスモについて語ったザメンホフのテキストは複数存在する。ヒレリスモという表現を明示したテキストは、すでに一九〇一年一月にワルシャワで刊行されたロシア語のパンフレット、『ヒレリスモ ユダヤ人問題解決構想』として発表されていた。ただし著者名は、「私は人間である」という意味のラテン語表記 *Homo Sum* であつた。¹⁸ またザメンホフは一九一七年四月一四日に亡くなるが、その最晩年にも「ホマラニスモに関する宣言の模範的テキスト」と題する文書を作成していた。¹⁹ この最後の文書と、一九一三年五月にワルシャワで作成された「ホマラニスモ宣言」とは、大筋はともかく、細部は結構変わっている。²⁰ ザメンホフの思想的な変化発展を精緻に跡付け検討することは、さしあたっての小稿の目的ではなく、また紙幅の関係もあるので、最終文書の宣言部分のみを全訳してホマラニスモを紹介しておきたい。その際、まずヒレルという名前を消し去り、「ユダヤ人問題解決構想」という副題も外して、ユダヤ民族主義を標榜するシオニズムからの決別と、より普遍的な平和志向が語られていることに注目しておきたい。

ホマラニスモに関する宣言の模範的テキスト

私は人類人 *Homarano* である。すなわち、ホマラニスム宣言に形式的にも公的にも完全に同意することとし、以下の条項を私の信条として承認する。

1

私は人間であり、全人類を一家族と見なす。人類が互いに敵対しあうさまざまな民族や民族宗教に根差す集団に分裂していることを最大の不幸の一つと見なし、この不幸は遅かれ早かれ消滅しなければならぬものであって、私の考えでは、暴力を用いずに当たり前の手段で消滅させるべく促すことは義務である。

2

私は、いかなる人間であつても人間に他ならないと見なすし、誰であつてもその人個人の価値と行為によつてのみ評価する。自分とは異なる民族、言語、宗教、社会階級 *socia klaso* に属していることをもつて人間を侮辱し、抑圧することは、野蛮な行為であると見なす。

私は、生涯のうちになしたるすべての善行については、いかなる両親のもとに生まれたか、あるいはどのような力を有しているかということとは関係なく、生きている人すべてがその貢献に応じて同等の権利を有している、と認識している。しかし私は、人間間の精神的・物質的不平等は、不正な、あるいは荒々しい物理的な力によつてではなく、社会的な法や機構を改善するための平和的な努力によつてのみ克服されるべきものである、と認識している。⁽²¹⁾

3

私は、いずれの国も、あれこれ特定の民族に帰属することなく、また生まれつきの住民であれ帰化した住民であれ、彼らの、推定できる出自、言語、宗教、あるいは社会的役割がいかなるものであれ、そうした住民すべてに対して完全に平等に帰属するものである、と認識している。一国の利害とあれこれ特定の民族や宗教のそれとを同じ

ものとして扱ったり、他の民族を支配することを一民族に許し、さらにもっとも基本的で生得的な権利、すなわち祖国に対する権利を他の民族に対しては拒絶する何らかの歴史的権利があると思わせることは、自力で救済する権利や武力を行使する権利が存在していた野蛮な時代の残滓である、と見なす。

4

私は、どの国家や地域であろうとも、いずれかの民族や言語、あるいは宗教の名前ではなく、中立的地名をつけるべきだと確信している。なぜなら、多くの国が民族名をつけているからである。そのために、特定の出自を有する住民が他の出自を有する住民に対して支配者であると思ひ込んだり、ある国に生まれついた末裔が、自分たちとはまったく無関係な別の国の利害と結びつくことになる。そうした国々が公的に中立的名称をもつようになるまでは、ホマラニスモの原則にしたがって、少なくともホマラニストが作成する特定の記録のなかでは、たとえば首都名に「国」、「州」、「地方」などの語をつけて、さもなくば人類人が合意できるような別の方法で呼ぶべきである。

5

私は、誰でもが個人生活では、自分にとってもっともふさわしいことばや方言を話し、もっとも好ましい宗教を信じていることを公言する、完全かつ明白な権利を有する、と認識している。ただし、言語や宗教が異なる人々と話し合うときには、中立的な言語、道徳、さらには中立的な慣習、中立的な暦を用いて、自分の民族や宗教に見られる特異なことを押し付けるのは極力避けるべきである。こうした中立的な事柄に関する問題が全世界で解消されない限りは、少なくとも人類人同士のあいだの特別な関係では、人類人が一致して受け入れられるような形式を用いるべきである。私は、民族間の闘争がないところでは、そうした国や都市の住民にとっては、中立的な言語が、

国語、もしくは地域住民の大多数によって話されている文化言語の役割を果たせることに気づいている。ただし、このことは、少数者にとつては、多数者との関係では得策である譲歩なのであつて、支配されている諸民族が支配している民族に対して支払うべき屈辱的な貢物として見なされるべきものではない、と認識している。

6

私は、民族名よりも「人間」という名前を上位に置くことに慣れるまでは、人間同士の不和がなくなることは決してないことに気づいており、「人民 popolo」という不正確極まりないことばがしばしば国内成員のあいだに、それどころか同一民族内ですら反目をもたらしているのです、どの人民に属しているのかという質問に対しては、したがって「私は人類人である」と答える。私の国や、私の住んでいる州、言語、あるいは私の出自らしきことについてとくに尋ねられた場合に限って、正確に答えることにしている。自分の出自を隠したり、市民としての義務を拒もうとしているといった疑いを抱かれそうな場合には常に、私の人種学的な実体を細部まで厳密に説明し、私の出自からすればあれこれの民族に属するし、市民としての立場からすればどこそこの国に属するが、私の信条にしたがえば私は人類人である、とすることにしている。

7

祖国とは、生まれた国のみを名づけうるし、そこでこそ確固とした住民でいられる。何らかの理由で、生まれた国と定住地が一致しなかった場合は、「現象上の祖国」や「生まれ故郷」、さらには「政治的祖国」ないし「故国」という表現を用いることができる。自分の祖先がそこをかつて支配したり、自分が属する民族がその大半で暮らしていたりするという理由で、私の故郷がどこか別の国の名前で呼ばれる場合は、その国の影響力が私に対して強

力に働き続けようとも、実際の居住者に及ぶそれぞれの国の所属原則に対立する罪となるし、市民としての義務を混乱させることにもなるので、そうした命名をするべきではない。しかしながら、政治的、歴史的、民族誌的、さらに地理学的理由から、ある国の観念や境界があまりにも不正確になって動揺し、しばしば絶え間のない論争や不和の理由になると、祖国と呼ぶ国を定義するに際しては、個人や民族にあつた好みによつてではなく、人類学的で非党派的なセンスでもつて、すべての人類人の意見が一致して作成された同一の原則で、すべての場所と状況について成し遂げられねばならない。すべての人類人によつてこの原則が最終的に作成されるまでは、疑わしい場合には「祖国」という不正確なことばの代わりに、より正確な表現である「祖国の都市」、「祖国の地域」、「父祖の国」などを用いばよい。

8

いかなる出自、言語、宗教、あるいは社会的役割を有するとしても、我が同国人、とりわけわが都市の住民の幸福に奉仕することを、愛国心と名づける。一民族の利益のために特別に奉仕すること、あるいは他国の人々に対して向ける憎悪については、愛国心と呼ぶつもりは決してない。自分が生まれた場所や故郷に対して深い愛情を注ぐことは、人間誰しもに共通するきわめて自然な事柄であり、異常な外部の状況こそがこのごく自然な感情を麻痺させる、と認識している。したがつて、我が故郷で、あらゆる労働が特定の一族にとつての便宜や栄光のためだけに利用され、その結果、社会的活動のために努力する気持ちが衰えてしまったとしても、故郷での異常な事態は早晩解消されるであらうし、私のせいではないのでこうした運命は拒否するという感情が高まっているのだが、この感情を子どもたちが理解することを信じて、絶望することなく、慰めとしなければならない。

母親から話しかけられ、また教えを受けたことばや方言に対して誰もが覚える愛情は、きわめて自然な感情であると思うし、こうした感情と闘おうとか、他人が抱くこうした感情を傷つけるつもりはまったくくない。しかしながら、言語は人間にとって目的ではなくて手段にすぎず、また分裂させるものではなく統合させるものであるべきであり、さらに言語的ショールヴィニズムが人間間の憎悪を作り出す主たる原因の一つだと認識しているので、もっぱら民族に都合のよい動機から、特定の言語をスタンダードとするつもりはまったくくない。私の母語についてとくに尋ねられた場合には、何らかの民族に都合のよい、政治的で、あるいはご都合主義的な傾向とは関係なしに、子どもの頃に両親と話していたことばであつて、しかもそのことばが自民族に帰属するの可否かといったことともまったく無関係な、そんなことばや方言だけを母語と呼ぶ。もつとも頻繁に話し、一番マスターしていて、お気に入り⁽²²⁾の言語は何かと問われれば、何らかのショールヴィニスティックな傾向とは関係なく率直にお答えする。しかしまた、私の信条や理想に基づいて、いかなる言語をあなたの言語とするかと問われれば、すべての人類人が共通に下した決定にしたがい、人類人の信条に最もふさわしい形で受け入れられた原則に依拠して答えねばならない。この原則が最終的に確立されるまでは、私にとって、私個人の、人類人的な感情を示唆した答えしかできない。

宗教とは真率な信仰の問題であるに過ぎず、民族にとって都合のよい分離手段であつてはならないと認識しているので、私が実際に信じているもののみを私の宗教と呼ぶ。ただし私の宗教がいかなるものであろうとも、以下に示すような、中立的・人間的な人類人主義の原則にしたがつて、信仰していることを公言する。

(a) 物質的世界および精神的世界におけるすべての原因のなかの原因である、私には理解しがたい至高の力を、「神」という名前、あるいはその他の名前で呼ぶことができよう。ただし、この力の本質を、自らの理解や心、あるいは自らが属する教会の教えが示すような形で表現する権利については誰もが有している、と私は認識している。神や、存在に関わる最も重要な問題についての信仰が、私のそれとは異なるからといって、誰かを憎んだり、嘲ったり、迫害することは決してしない。

(b) 至高の力が及ぼす本質的な命令は各人の心のなかで良心という形をとって刻みこまれており、もつとも中心的で、すべての人間を拘束するこの命令に関わる原則は、以下の通りであることを承知している。すなわち、汝が遇されたいと願うことを他者にも行え、ということである。宗教にあるその他すべてのことは、各人の信仰に応じて、その掟を、遵守すべき神のメッセージか、あるいはさまざまな民族が生んだ人類の偉大な教師が伝説とともに残した、つまり人間の手になる解説と考えることのできる補足として見なせるし、さらにはまた人間によって作り出されたのだから、それを履行するか否かということは我々の意思次第である慣習として見なすこともできる。

(c) 訓練すれば良心の声を十分に聴きとることはできると認識しているので、何らかの人類主義のグループに属し——私にとっては可能なことである——、神学的な探究をしたり、人類人主義の精神にふさわしい形で倫理上の諸問題を実践的に応用する際には、こうしたグループの集まりに参加すべきである。

(d) 宗教上の枠組みに元来備わっていた不平等だとか、そこに起因する風習、教育、慣例、生活設備、さらには共感する感情のようには、人間は分断されていない、と認識している。したがって、現存するある宗教の特定

の教理を信じるとしたら、私の祖先が信徒であつたかどうかとは関わりなく、信じるものである。その逆に、教理を備えた、既存宗教を何ひとつ信じないとしたら、私が確信して留まることで人間を惑わせ、何世代にもわたって代々際限なく引き継がれてきた民族の分散を育むことになるので、単に民族にとって好都合な動機で宗教に留まり続けるべきではない。その代り、公的には無信仰者と名乗るか、中立的で、いずれの民族にも、議論が戦わされている教条のいずれとも関わりなく、すべての自由思想家たる人類人によつて、一致した合意に基づいて練り上げられた宗教の信者であると、公的には名乗るつもりである。したがつて私は、完全なる形で、かつ代々引き継いでいくものとして、その宗教の名前、倫理的基準、慣習、祝祭、さらには共同体としての企画を受け入れる。しかしながら、仮に私が自由思想家であるとしても、現在の私の居住地では、よく組織され、私自身と私の家族とが精神的な満足を覚えて賛同できそうな、中立宗教的なコミュニティはまだ存在しないので、さしあつては生れついた宗教に留まるしかない。ただその場合も、私個人の信条がいかなるものであるかを示すために、常に現在の宗教の名前に、すべての自由思想家としての人類人が一致してその目的のために受け入れた宗教名を付加しなければならない。

終わりに——ザメンホフ評価の一端

国際的にはきわめて著名なザメンホフであつたが、第一次世界大戦中の一九一七年四月一六日、したがつてポーランドの独立以前に営まれた葬儀は、彼の名声に比べれば寂しいものであつたという。その様子は、「ザメンホフの葬儀には、ラザルがユダヤ人だつたという理由で、政府代表はおろか、市長の弔辞さえも贈られず、近所に住む貧しい

ユダヤ人が数十人とワルシャワのエスペランティスト約二〇人とが参列しただけであつた⁽²³⁾、と描写されている。この「近所に住む貧しいユダヤ人」のなかには、まず間違はなくシオニストはいなかったはずである。やがて計報が全世界に伝わっていくなかで、さまざまな追悼の文章が発表されたが、それらのなかで注目したいのはマイスル Joset Meisl⁽²⁴⁾によるものである。ドイツ語圏のユダヤ人向け雑誌「Der Jude」に掲載された文章のタイトルは「ヒレリスト (ヒレル主義者)」となっており、見事なまでにザメンホフのホマラニスモへのさらなる発展を無視し、ホマラニスモという単語すら用いてないのである。ザメンホフが最終的にたどり着いた思想的地平は、ユダヤ民族主義から決別し、ユダヤ教色をもほとんど消し去って得られたものであり、ザメンホフにとってみればもつとも重要な成果であつたはずである。マイスルの追悼文に見られた、ホマラニスモ無視という特徴は、その後のユダヤ人史関係の辞事典類に共通して引き継がれており、まったく無視するか、取り上げても内容説明にはほど遠い冷淡な扱いである⁽²⁵⁾。この点は、スラヴ言語学者であつた千野栄一が行つた、要点を押さえながらも簡潔に記述した次の説明と引き比べてみると、鮮やかな対照をなしている。「国際的に中立な言語のほかに、すべての宗教に共通である道德原理の総和ともいふべき中立的な宗教を人類が採用すれば、人間間の関係はよくなるに違いないとする〈ホマラニスモ〉という学説も提唱した⁽²⁶⁾」。

ここまで検討してくれば、シオニズムを尊重、ないし重視する立場から見ても、ザメンホフに対する評価が一面的なものにならざるを得ない事情も、また判明するのである。今日の、グローバルなレベルでのユダヤ人社会を見ると、一方には、数からすれば少数の、しかし強力なシオニズム批判が存在するものの⁽²⁷⁾、他方には、圧倒的多数のシオニズム支持、ないし容認の潮流が存在している。こうした現実のなかでは、ザメンホフの影も薄れていかざるを得ない。

また、英語が事実上のグローバル・スタンダードになっている実態も厳然として存在しており、その結果、国際的な意思疎通の場では優劣の関係が生じている。であるからこそ対等なコミュニケーション手段としてのエスペ란ートの重要性が増しているのだとする主張にはそれなりの説得力を認めねばならないが、残念ながらエスペ란ートが力強く普及していく兆しはまだ見えない。

筆者がワルシャワのユダヤ人墓地にあるザメンホフの墓を前にして感じた一抹の「寂しさ」は、かならずしも邪推ではなかったようである。

註

(1) エスペ란ートや同種の言語は、これまでしばしば人工語と呼ばれてきた。たとえば『広辞苑』(第六版)では、エスペ란ートを「ザメンホフが創案した人工の国際語」と説明している。しかし、いわゆる自然言語、あるいは民族語であっても人為の所産であり、人工の結果に他ならないのであって、そこには計画的に作り出されたか否か、の違いしかない。したがって、最近ではエスペ란ートなどを計画言語と表現することが多い。なお、ザメンホフ自身は国際語と名付けていた。

(2) エスペランティストは、しばしばザメンホフを「(私たちの)大先生 [a nia Majstro]」と尊称で表現する。

(3) Art. “BIALYSTOK”, in: *Encyclopaedia Judaica*, 2nd. ed., vol.3, 2007.

(4) これまで、内外の熱心なエスペランティストによって数多くのザメンホフ伝が書かれており、日本語で読めるものだけでも決して少なくない。主なものを列記すれば以下の通り。

伊東三郎『エスペ란ートの父 ザメンホフ』、岩波書店、一九五〇年

エドモン・プリヴァー「ザメンホフの生涯」、梅棹忠夫・藤本達生訳、『世界の人間像』第一六卷、角川書店、一九六五年、所収(原著一九三一年)

岡一太『わが名はエスペラント——ザメンホフ伝——』、ザメンホフ伝刊行会発行、一九八〇年

マージョリー・ボウルトン『エスペラントの創始者ザメンホフ』、水野義明訳、新泉社、一九九三年（原著一九六〇年）

小林司『ザメンホフ 世界共通語を創ったユダヤ人医師の物語』、原書房、二〇〇五年

ただし朝日賀昇は、一九七二年の論文で、「これまでのザメンホフ伝には、彼がユダヤ人であったことがほとんど無視にされていたし、当時のロシアの革命的情况についてもあまり触れていないのが常であった」と批判している。朝日賀昇「ユダヤ人差別と闘ったザメンホフ」、『エスペラント *La revuo orienta*』（日本エスペラント学会機関誌）、53-a, n-ro 12、一九七二年一二月、二〇ページ。

また、エスペラント版のザメンホフ全集 *pvs* を編集した、いとうかんじによる浩瀚な『ザメンホフ』、全八巻、永末書店、一九六七年～一九七八年、があるが、小説というスタイルをとっており、記述の細部が判別しがたい。

なお、ホロコーストを奇跡的に生き延びたザメンホフの孫に対して、ジャーナリストが長時間にわたってインタビューした記録があり、これもザメンホフ伝の性格を有する。L・C・ザレスキーザメンホフ／ロマン・ドブジンスキ『ザメンホフ通りエスペラントとホロコースト』、青山徹・小林司・中村正美監訳、原書房、二〇〇五年

- (5) コルジェンコフはザメンホフの母語はロシア語だったと指摘している。Aleksander Korzenkov, *The Life of Zamenhof*, translated by Ian M. Richmond, edited by Humphrey Tonkin, New York, Mondial in cooperation with Universal Esperanto Association (Rotterdam), 2010, p. 8. 他方、田中克彦はザメンホフの母語はイディッシュ語であったと強く示唆している。田中克彦『エスペラント——異端の言語』、岩波書店、二〇〇七年、一〇〇ページ。

- (6) Stephen D. Corrsin, *Aspects of Population Change and of Acculturation in Jewish Warsaw at the End of the Nineteenth Century: The Censuses of 1882 and 1897*, in: *Polin*, vol. 3, 1988.

- (7) ニコラス・デ・ランジュ『ジュイッシュ・ワールド』、長沼宗昭訳、朝倉書店、一九九六年、一〇一ページ。

- (8) 同、一一〇ページ。

- (9) *hebreo el la geto, de cionismo al hilelismo*, iam kompletigota plena verkaro de l.l. zamenhof (pvz), kajero 5, red.

Ludovikito (Ito Kanzi), Kioto, eldonejo Ludovikito, 1976. p. 52 ; Andreas Künzli, *L.L. Zamenhof (1859-1917). Esperanto, Hillelismus (Homaranismus) und die „jüdische Frage“ in Ost- und Westeuropa*, Wiesbaden, Harrassowitz Vlg., 2010. S. 109.

- (10) cf., Art.“PINSKER, LEON”, in ; *Encyclopaedia Judaica*, 2nd.ed., vol.16.
- (11) A. Korzhenkov, op. cit., p.60.
- (12) ザレスキ―ザメンホフ／ドブジンスキ、前掲書、三〇四―三〇五ページ。
- (13) *gis la homaranismo. 1896 - 1906, puz, originalaro 2*, 1990. p. 1138, 1155.
- (14) cf. Todd M. Endelman, *Leaving the Jewish Fold. Conversion and Radical Assimilation in Modern Jewish History*, Princeton & Oxford, Princeton U.P., 2015. p. 305-308. またエスペラント運動は、ナチス支配下では、ユダヤ人の創案ということだけではなく「民族精神」を破壊するものとして弾圧されたが、それどころか第二次世界大戦前の日本やスターリン支配下の旧ソ連など、全体主義支配の下では、コスモポリタニズムに対する警戒から同様に過酷な迫害を被った。参照、ウルリッヒ・リンス『危険な言語――迫害のなかのエスペラント――』、栗栖継訳、岩波書店、一九七五年。
- (15) ユダヤ系のフランス陸軍大尉ドレフュス Alfred Dreyfus は、一八九四年に、ドイツに情報を売り渡した廉で終身流刑に処せられた。その後、真犯人が判明したもののフランス軍部は隠蔽し、九八年以来ゾラなどの知識人・共和派が当局を弾劾して、第三共和政を揺るがす一大政治スキャンダルとなった。ドレフュス自身は、九九年に減刑され、最終的には一九〇六年に無罪となって復権した。
- (16) ユリウス・グットマン『ユダヤ哲学 聖書時代からフランツ・ローゼンツヴァイクに至る』、合田正人訳、みすず書房、二〇〇〇年、三五ページ。
- (17) ヒレリスモとホマラニスモについては次の論文も参照せよ。萩原洋子「ヒレリスモとザメンホフ」(一)～(五)、『エスペラント』54-a, n-ro 2~9, 一九七三年二月～九月。津金美南子「ホマラニスト ザメンホフ」(一)～(二)、『エスペラント』54-a, n-ro 1~2, 一九七三年一月～二月。

- (18) *puz, originalaro 2*, エスペラント訳, p. 1123-1205. なお *puz* では、ヒレリスモのロシア語による草案が、ユダヤ人知識人への呼びかけ文書として一九〇〇年に書かれた、と推定している。 *ibid.* p. 1071-1115.
- (19) *destino de ludovika dinastio. 1907-1917*, *puz, originalaro 3*, p. 2720-2732. *puz* では、この文書を一九一七年二月一日と同月一九日にそれぞれ書かれた手紙のあいだに配置しており、この間に作成されたと推定している。
- (20) *puz, originalaro 3*, p. 2582-2588. 一九一三年の宣言については和訳があるが、ここでは文書作成の時期が同年九月になっており、恐らく単純な錯誤であろうと思われる。L・L・ザメンホフ「著・述」『国際共通語の思想——エスペラントの創始者ザメンホフ論説集』水野義明「編・訳」、新泉社、一九九七年、九五—一〇五ページ。なお、一九一七年文書の和訳に際してはキュンツリのドイツ語訳も参照した。A. Künzli, a.a.O., S. 527-534.
- (21) 後半の段落は一九一七年の文書で追加された。
- (22) 原文では隔字体で表記されている。
- (23) 小林司、前掲書、二四六ページ。ボウルトンが、「葬儀に間に合った一族の人びとと、ワルシャワのエスペランティストとザメンホフの貧しい患者が大勢加わった。：ゆつくりとした葬列は、：ユダヤ人墓地へと進んだ。のろのろと進む黒い蛇は、ますます長くなっていった」と記述し、やや異なつた印象を与えている。ボウルトン、前掲書、二七五ページ。ただしここでは、小林が、自著についてあとがきで、最新の研究成果を手広く採り入れ、ただ一カ所のエピソードを除けば全部確かな論拠がある、と自負しているので、小林にしたがう。
- (24) *Internetarchiv jüdischer Periodika*. <http://www.compactmemory.de/1>
- (25) 「ザメンホフ」の項目を参照したユダヤ人史関係の辞事典類は、以下の通りである。
Jüdisches Lexikon. Ein enzyklopädisches Handbuch des jüdischen Wissens in vier Bänden, Jüdischer Verlag bei Athenäum, 1987. (Nachdruck d. 1. Aufl., 1930)
Grosse Jüdische National-Biographie. Ein Nachschlagewerk für das jüdische Volk und dessen Freunde, Krausreprint, 1979. 初版の該当巻には刊年が記載されていないが、一九三〇年代前半と推定できる。

Philo Lexikon. Handbuch des jüdischen Wissens, Jüdischer Verlag im Athenäum Verlag, 1982. (Unveränderter Nachdruck der 3. Aufl. von 1936)

Encyclopedic Dictionary of Judaica, Keter Publishing House Jerusalem, 1974.

The Blackwell Dictionary of Judaica, Blackwell, 1992.

Routledge Who's Who in Jewish History, Routledge, 2nd. ed., 1995.

Encyclopaedia Judaica, 2nd. ed., 2007.

なお、以下の二点にはそもそも「ザメンホフ」の立項がなかった。

Lexikon des Judentums, Bertelsmann Lexikon-Verlag, 1971.

Encyclopedia of Jewish History. Events and Eras of the Jewish History, Facts on File Publications, 1986.

- (26) 千野栄一「ザメンホフ」、伊東孝之他編『東欧を知る事典』、平凡社、新訂増補版、二〇〇一年。一六〇ページ。
- (27) 一例として、参照、ヤコヴ・M・ラブキン『イスラエルとは何か』、菅野賢治訳、平凡社、二〇一二年。